「すきまを埋めていく復興」が求められる

コープあいちのツアーからみる、岩手県気仙地区の現状

ライター：野口武

11月9日～11日の3日間、組合員25人が参加し、コープあいち「学びと交流 with 三陸気仙」が開催されました。コープあいちは、過去に10回の被災地交流ツアーを実施しています。11月現在の岩手県気仙地区の様子を報告します。

陸前高田の住民と固い握手を交わすコープあいち組合員（右端）。

●がれきの山が残る陸前高田

組合員一行は、津波によって街全体が壊滅的な被害を受けた陸前高田市を訪れました。かつて街があった場所は、雑草に覆われた野原となり、市役所や体育館などいくつかの建物だけがかろうじて残ります。朽ち果てた建物の１階にはがれきが残り、津波の脅威がうかがい知れます。

現在、これらの建物の取り壊しが急ピッチで進められ、かつての街の面影は日毎に失われつつあります。街の再建に向けて動き出してはいるものの、まだがれきの山はいたるところにあり、街が形成されるまでには早くとも７、８年はかかると言われます。

●前に進めない現状

阪神・淡路大震災では、２年を過ぎた頃から多くの人が仮設住宅を出て自立し始めました。しかし、岩手県沿岸部の気仙地区では、いまだ90％の人が仮設住宅を出るめどが立っていません。生計を立てるための仕事の不足、膨大な時間を要する地盤沈下した土地のかさ上げ、高台の土地の価格高騰など、さまざまな問題が重なり、多くの人が前へ進めない状況です。先行きの見えない中で、仮設住宅での生活が長期化することが予測されます。

市民会館の１階には今もガレキが積み重なる。

●感じられた変化

震災から１年８カ月。ツアーに複数回参加している組合員は、今回ある変化を感じたといいます。それは、これまで交流してきた方々が、身内の死について話し始めるようになったことです。気仙地区の人々が、近しい人の死を受け入れ、次への一歩を進めるよう努力をしている証なのかもしれません。

●今、必要なこと

同じ気仙地区で活動をすすめている神戸大学大学院教授の松岡広路さんは、今回コープあいちが開催した現地支援団体の交流会で、「今必要なのは、被災地の方々と交流しながら、地道に進めていく『すきまを埋めていく復興』です」と語りました。被災地は今、一人ひとりに寄り添い、孤独や寂しさなどを抱える人の「精神的なケア」を視野に入れた、長期的な支援を必要としています。

今回のコープあいちのツアーでは、組合員と被災地の方が、連絡先を交換する場面をよく見かけました。個と個がつながり、「友」として、被災地の問題に取り組んでいこうとしているのです。また、現地で手作り品を作っている方との交流もツアーに組み込まれていました。コープあいちの被災地交流ツアーは、組合員が被災地の人々と交流する中で、愛知にいながらにして現地の人々とどのように協働していくのかを考え出していく段階に進んでいます。

手作り品を作る方々との交流の様子。即売会も行なわれた。